小美玉市の歴史を知ろう⑨

古代の官道

～おみたまに「東海道」が通る～

現代日本における高速道路網は、東京―名古屋―大阪―福岡などの大都市間だけではなく、地方都市間でも整備が進んでいます。その総延長距離は9，332㎞（平成19年度末現在）にも及びます。

今から約1，300年前の7世紀後半に高速道路網に匹敵するような道路網が完成していました。この交通網は、当時の中央集権国家が整備管理した道＝駅路、伝路（古代の官道）と呼んでいます。古代日本の「行政区画」は、「関東地方」といった現在の区画とは違い、「五畿七道」に分かれていました。七道の中で、茨城県（常陸国と下総国の一部）は、東海道の最北端に位置しています。

駅路のひとつ、道としての東海道は、都から東海道諸国の国府を結び、30里（16㎞）ごとに、駅馬を常置した駅家（高速道路のSAのような施設）が設置されました。駅家は公用で役人が移動する際に馬の交換、食料や水の補給、休息や宿泊の場として利用されました。中路である東海道の駅家には10疋の馬が常駐することが決められていました。また、駅路は地方から都へ税金として納められる生産物の運搬などにも利用されました。

古代東海道ルートは、中世になると大部分が廃れてしまったため、よく分かっていませんが、発掘調査でその痕跡が確認されている例もあります。10世紀初頭に編纂された延喜式によると、常陸国府（石岡市）から陸奥に向かう最初の駅家は、安候駅家（笠間市安居）とされています。また、駅路は、国府間を最短距離で結ぶように直線的に整備されたとされています。石岡市と笠間市安居を直線で結ぶルートには、小美玉市が所在していますので、古代東海道は、間違いなく小美玉市西部を通過しているものと思われます。また、安候駅家の北側に位置する五万堀遺跡（笠間市）では、両側に溝をもつ幅10m前後の直線的な古代の道路跡が確認されています。

小美玉市内でも発掘調査等では、道路跡は確認されていませんが、羽鳥地区の開拓踏切付近、納場地区の泥障塚古墳付近、手堤地区などで道路跡と思われる遺構が確認されています。開拓踏切付近と泥障塚古墳付近では、中央が凹んだ堀状の遺構が直線に延びています。また、手堤地区では、送水管敷設工事の際に道路跡が確認されています。この遺構は、幅が9m程の平坦面があり、両側には側溝のような溝が掘られていました。その特徴や立地から古代東海道の痕跡と推定されています。

11世紀中頃～後半、「源義家らが奥州征伐のためにこの地を通過した」との伝承が推定東海道ルート沿いに数多く残されていることからも、古代東海道が存在していた裏づけができます。ルート沿いには、古代の集落は確認されていませんが、官道を背景にした有力者の集落が存在していたと思われます。

常陸における古代の交通路

羽鳥地区開拓踏切付近の道路跡

納場泥障塚古墳付近の道路跡

（次回の掲載は1月号です）

【小美玉市教育委員会 生涯学習課☎26―9111】